
『たんてえ物語』修正ver.【掌編・ミステリ】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『たんでえ物語』 修正ver. 【掌編・ミステリ】

【Nコード】

N0842R

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

失踪した猫を見張る探偵がいた。失踪した猫を捕まえるのが彼女の仕事だった。猫をおびき寄せる猫餌とマタビを使い彼女は猫を捕まえた。

彼女は父の跡を継いで探偵になった。その父が夢に現れて……。

『たんでえ物語』修正ver. 作：山田文公社

猫を捕まえる依頼を受けた私はトレンチコートに中折れ帽を目深に被り、餌を撒いて張り込みを続けていた。虫取り網より頑丈な魚取り網も準備万全でいつ猫が来ても捕まえられる態勢であった。

しばらくすると、近所に住んでいる野良猫達が集まってきた。猫餌に食らいつくように群がる猫を見ながら、手元の写真と懸命に照らし合わせていた。

すると目標となる猫が悠然と猫餌を食べにやって来た。白と黒の斑猫は猫餌をゆつくりと食べている。すかさず私はマタビを猫の群れに向かって放り投げた。猫たちは一瞬驚いたが、すぐにマタビに群がり狂ったように転がり始めた。

私は物陰から飛び出して、目標の猫へと魚取り網をかぶせるのだった。捕まった猫はしばらく転がっていたが、すぐに網に気づき暴れ始めた。そこへ追い打ちをかけるようにマタビを与えた。網からゲージへに猫を移すと猫はしばらく暴れた後に観念したのか、おとなしくなった。

私は猫の入ったゲージを手には事務所へと帰った。

「ただいま戻りましたー」

誰もいない事務所に戻り猫に餌を与えて、再度写真と猫を照らし合わせてみる。ゲージの猫と写真を再度見比べる……間違いはない、これは依頼主の猫である。

ただ、こうしたペット探しの依頼にはいろいろと問題がつきまとう、どう見ても写真と同じなのに違うと言われる事もあるし、届けたり必要ないと言われる事もある。つまり逃げたのではなく、意図して逃がした場合である。

なぜ探偵に依頼するのは事情に依るだろうが、少なくとも私が見つける事を望んでいないのは確かであり、それ故にいろいろと難癖をつけて受け取らない、最悪の場合、調査費すら支払いを拒否する者もいるのだから、なかなか一筋縄ではいかない。

そういう事の無いように、依頼書は契約書形式になっていて、万が一の場合でも支払いの有効性を持たせられるのだ。

そのために私はパソコンを開き、今日の捜査状況の報告書を作成する。つまり一日どのような捜査をおこなったかの報告である。時には複数の依頼をまたがっているため、ボイスレコーダーやメモを執り記録を残し、事務所に戻り複数の捜査報告書をまとめる事もある。今回はこの報告書だけで済むので、比較的早く仕上がった。

「ふうー終わったー」

報告書をプリントアウトして、事務所のソファーに横になった。

タバコのヤニで汚れた天井をぼんやりと眺めていた。この事務所は私の父のもので、私はその父の跡を継いで探偵学校を通って探偵になった。その父は、とある依頼の捜査途中で行方不明となり、未だに帰っては来ていない。

まだ、高校生だった頃に事務所に詰めている父へ差し入れに来た時、いまの私と同じ格好でソファーで横になっている父に毛布を掛けた事を思い出した。時々こうして父と同じ格好でソファーで横になる。ふと父が帰って来そうな感じがする。

しばらく目を閉じた。今日は冷えるはずだけど、このトレンチコートのおかげでほとんど寒くない、これは父のお気に入り、クローゼットには同じものが着も入っていた。しかし、これはなかなかの機能性が高くて雨も弾くし、暑すぎず、寒すぎずと全ての上着を極めている。ただ難点を言えば少々重たい所だけど、この仕事の為にあるのではないかと思うぐらいである。

ふと鼻先にタバコの匂いが、かすめた。体を起こすと事務所の机

に腰掛けてタバコを吸っている父がいた。

「お父さん！」

事務所の椅子がくるりとまわると、目深に被った中折れ帽に、襟を立てたトレンチコートを着た父がいた。

「よう、あゆみ……元気か？」

父の問いに私が頷くと、とても安心した顔で笑った。

「そうか、皆、元気か……そうだ、今日はお前に良い物をやろうと思っとな」

そう言い意地悪い笑みを浮かべた。

「あゆみの誕生日だからな、じゃあ暗号文だ……光りの道から外れた、知識の倉庫の頂上に、全てを開く鍵をおいた、天使が舞い降りた日と鍵を持って、向かい合う円卓の底に眠る至宝を手に入れる、じゃあなあゆみ」

私がつくと探偵になったのは、父のこうした暗号を解いていたからだ。父は誕生日になるとこうして暗号文を教えてくれる。その暗号を説かないと誕生日のプレゼントが無いのだ。でも、それは父の『ただ与えるだけではなく、その道筋を示し勝ち取らせる方が良い』という信念からである。

与えられるだけでは人は成長しない、その道筋を教え示して、自ら勝ち取らせる方が有意義である。それが父の信条だった。それはわたしとて例外ではなかった。

父の暗号を解くうちに私は探偵になっていた。それが父の思惑なら、私は見事に思惑にはまったのだらう。でも、悪い気はしなかった。秘密を解く楽しさを教えて貰ったから……。

目を開けるとそこには父は居なかった。それが夢だったのは間違いない。けれど出された暗号は父らしいものだった。私が大きくなってからは暗号はさほど難しいものではなくっていった。むしろ中学、高校の時のの方が計算が必要だったり、大がかりな仕掛けがあり、解くのも簡単ではなかった。

そして今回の暗号文は父の出したなかでは比較的、簡単な部類であつた。私は体を起こして光りの道から外れた場所を向いた。光りの道……つまり太陽の通る道の事である、太陽は東から昇り、南を通り、西へと沈む……従つて太陽の通る道から外れているのは“北”なので、北の方角を向くと、そこには本棚が置かれていた、知識を指しているのは本、倉庫は保管する場所を指している、つまり本棚で、頂上とは本棚の枠の上になる。

手近な椅子に昇り本棚の上を見るとそこには小さな鍵がおかれていた。あとは向かい会う円卓の下、つまりは事務所の真ん中にある応接用のテーブルの下を指している。

テーブルを動かしてカーペットをめくりあげると、床板が現れた。恐らく掃除の時になんとか動かした事はあるが、こうしてゆっくり見るのは初めてだつた。一見すれば何の変哲もない床板だつた。私は床板の一枚一枚を叩いて音の反響を聞いていった。

すると幾つか妙に空洞音のする床板があつた。ポケットからツールナイフを取り出して、ナイフを床板の隙間へと差し込んだ。すると手応えなくナイフは床へと吸い込まれていった。ナイフの刃をゆっくり寝かしあげていくと、床板がゆっくりと持ち上がった。

持ち上がった床板をはがしていくと、そこには箱や書類などが保管されていた。書類は恐らく父が最後に担当していた物に違いなかつた。ある夜に事務所が荒らされた事があつた。そして父は失踪した。原因となる調査記録を捜したが、どこを探しても見あたらなかつた。

当時は荒らした犯人が持ち去つたと思つたのだが、父はしっかりと隠していた。

いまずぐ読みたい気持ちを抑えて、書類を脇に置いて小さな箱を手につ取つた。

箱はダイヤル式と鍵式の二重構造だつた。

ここまで順調だつたのだが最後の“天使が舞い降りた”の部分がわからなかつた。いろいろと適当な数字をまわしてみたが、そのど

れもが違っていた。自分の誕生日を入れたときに箱から小さな音がした。鍵をまわすと蓋がゆっくりと開いた。

そこに五芒星の刻印された指輪とラッピングされた袋が入っていた。ラッピングを開けると私の名前が書かれたバスデーカードとネックレスが収まっていた。恐らく失踪直前の物に違いなかった。私は添えられた手紙を開いた。

“ あゆみ誕生日おめでとう。ネックレスはお前へのプレゼントだ。同梱している指輪をもって作家の渡部亮一^{わたべりょういち}を尋ねなさい、少なくともお前の力になってくれるはずだ。”

手紙を読み終えて机に置いた。手にしたネックレスは、シンプルで可愛い物だった。私はそれを首にかけて窓の外を見つめた。

「ありがとう、お父さん……わたし必ず見つけるからね」

私はそう誓い、残された資料に目を通していく……父の残した最大の謎を解き始めていく。

「必ず見つけるから……」

翌朝あけて、猫を依頼主のもとへと届けた。小さな女の子が満面の笑みでお礼を言ってくれた。

「ありがとう、たんでえさん」

私は少女のお礼に笑顔で答えた。

「どういたしまして」

猫はゲージの中で『にゃお』と鳴き、おおきなあくびをした。

（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

出来る限り修正してみました。たぶんシリーズ化します（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0842r/>

『たんてえ物語』修正ver.【掌編・ミステリ】

2011年2月21日10時55分発行